

# ストーリーテリングと絵本における 再話文学の位置づけ

— ラフカディオ・ハーンの *A Living God* の改変をめぐって —

木 内 英 実

## I. はじめに

児童図書館員（公共図書館の児童サービス担当者）にとって児童サービスの一環として開催されるお話の会は、ストーリーテリングのお話や絵本の価値を見極めると共に子ども理解を深める場として位置づけられる。実際にそのお話を読んだ際の子どもの反応に基づき、子どもに与えるべきお話の内容とストーリーテリングの技術は検討されてきた。

欧米にその源を発する、児童図書館員による児童文学研究が、日本の児童文学研究と児童文学創作・翻訳に影響を与えたことは、<sup>(1)</sup>石井桃子の業績と経歴において明らかである。

石井の例からも、児童文学研究と児童サービス技術の充実は、密接な関連を持ち展開してきたことが分かる。

中でも幼い子どもに与えるお話の内容精査と技術について、古くは日本の幼児教育の父、倉橋惣三が談話について多くの論稿を残したように、幼児教育の分野で重要視されてきた。これらの内容は現在でも保育者養成課程における「児童文学」「児童文化」「表現指導法」「言葉指導法」「言語表現」等授業で扱われている。

本論では、日本の「小学国語読本」に掲載された「稲むらの火」の原話として知られるラフカディオ・ハーンの *A Living God* の19世紀末から21世紀までの欧米での伝播とその再話について、ストーリーテリングと絵本への展開の側面から検討する。

## II. ラフカディオ・ハーンの *A Living God* 概要

### 1. 書誌的事項

雑誌初出 *The Atlantic Monthly* Vol. 78, Issue 470, Dec. 1896. 単行本初出 *Gleanings in Buddha-Field : Studies of Hand and Soul in the Far East*, Boston and New York, Houghton, Mifflin and Co., 1897 (邦題『仏の畑の落穂』) 収録。更に同年に同名単行本が異なる出版社2社 London and New York, Harper and Brothers, と Kegan Paul, Trench, Trubner, & Co. Ltd より出版された。いずれの単行本でも *A Living God* は巻頭に収録された。

## 2. 内容

初出雑誌・単行本共に、作品の構成に変化がなく3章構成である。1章は、神社建築の様式と「神社」という単語の英訳の様々、神の立場から見た信仰と祭礼についての空想、そして生神の意味について記された。2章は、明治以前の村にあった相互扶助組織「組」についての解説である。3章が、本論で扱う浜口五兵衛が生神として祀られる理由としての逸話である。

そこでは、明治を去ることほど遠い昔の秋の夕方に、日本の海岸地方に起きた「ツナミ」災害に際して、村人から「おじいさん」「長者」と尊敬を受けていた浜口五兵衛が、村民400人を救った英雄的行為と、その後日談が語られた。以下に要約を記す。

入江を見おろす小高い台地のきわに建てられた浜口の屋敷の縁さきから豊作を祝う祭令の準備で賑わう村を見ていた五兵衛と10歳になる孫の忠が、地震の揺れを感じたことから始まる。五兵衛は暗くなった海の沖あいに汐が引いていく現象を認め、祖父から聞いた話を思い出した。そして、孫にたいまつを点けてくるよう命じ、火がついたたいまつが届くや否や、自分の田圃の数百の稲塚に火をつけて回った。忠が五兵衛の狂ったような振る舞いに啞然として泣きだす中、村人はその火事に驚いて五兵衛の屋敷の前に集まる。村人全員が集合した時に、五兵衛が海を皆に示すと、「ツナミ」が台地の下の村落を飲み込む。

自分の稲塚を犠牲にしてまで村人の命を救った五兵衛の先見の明に対して、忠は誤解していたことを詫び、村人は土下座する。

五兵衛の知恵と勇氣ある行動に対する敬意の念から、五兵衛を「浜口大明神」と村人は称し、村が復旧した後に五兵衛存命中から「浜口大明神」を祀る神社を建立し五兵衛の霊に祈念した。

章末において、「浜口大明神」を巡り、「わたくし」と「哲学を専攻している日本の友人」との間で「西洋の靈魂説」と「万物の心は一なり」という日本人との考え方の違いが、明らかにされる

(以上、人名等の日本語表記と参照訳文については1975年恒文社刊『仏の畑の落穂』平井呈一訳「生神」による)

## 3. A Living God の依拠

<sup>(2)</sup>平川祐弘の調査によると和歌山県の広村(現有田郡広川町)出身の濱口儀兵衛(1820～1885 号: 梧陵)は、1854年11月5日に広村で起きた安政津波の体験を『濱口梧陵手記』(『濱口梧陵傳』杉村楚人冠編 1920収録)に書き留めたという。

その内容は「五日。(略) 勿々辞して再び八幡鳥居際に来る頃日全く暮れたり。是に於いて松火を焚き壮者十余人に之を持たしめ、田野の往路を下り、流屋の梁柱散乱の中を越え、行々助命者数名に遇えり。尚進まんとするに流材道を塞ぎ、歩行自由ならず。依って従者に退却を命じ、路傍の稲むらに火を放たしむるもの十余以て漂流者にその身を寄せ安全を得るの地を表示す。この計空しからず、之によりて万死に一生を得たる者少なからず。斯くて一

本松に引き取りし頃轟然として激浪来たり。前に火を点ぜし稲むら波に漂い流るるの状観るものをして転た天災の恐るべきを感じしむ。波濤の襲来前後四回に及ぶと雖も、蓋し此の時を以て最とす。」(傍線筆者) というものである。

1896年6月15日に起きた三陸大津波の報道の中で、再度『濱口梧陵手記』に記された安政津波の体験談が注目を浴びた。『大阪毎日新聞』同年6月19日号には、「@海嘯襲来の種類(略) 安政年度八戸の大海嘯は最初甚だしく退汐して、沖の魚属など砂原に残されたるをば珍しがり、漁夫が挙って潮干狩りに押し出したる途端山の如き怒涛盛返し来って遂に市街過半を持去りしと。又紀州に起こりし海嘯は一進一退漸次に増水したるものにして、當時有田郡の住民は夜中の事ゆえ逃道に迷いたるを、土地の豪農濱口儀兵衛氏は早くも氣轉を利かして後ろの山に積みありし稲村に火を附けさせれば、全村之を目当に駆け出して生命を助かりたりとぞ但し今回の海嘯は如何なる模様にて寄せ来りしか、未だ之を知ることを得ず」との記事がある。(傍線筆者)

これによりハーンが直接、『濱口梧陵手記』を読んだというよりも、それを基にした『大阪毎日新聞』記事の他者による読み語り等を通じて浜口の逸話に触れ、*A Living God* 第3章の創作の源としたと考えるのが自然であろう。

『小泉八雲事典』(恒文社 2000年)の「生き神様」の項目では、平川祐弘により、「人を神として祀る習俗——とりわけ民族神道の際立った特徴である生き神崇拝を、西洋人読者にどのように『同情と共感をもって』理解させるかという点」に苦心したハーンが、当時壮年期の浜口を老人とすること、住民の道標として稲村への放火を津波への事前警報とすること、実際には建立されなかった神社を実在のように語ること、以上3点の改変を史実に加えたことが解説された。

#### 4. 物語の構造に関する考察

*A Living God* 第3章は、話の進行に活力を与える、演劇的な会話が特徴的である。会話は浜口と孫の忠、村人、「わたくし」と「哲学を専攻している日本の友人」である。

次頁にそれらの会話と地の文をまとめた一覧表を記す。(〈表1〉及び〈表2〉における訳文については1975年恒文社刊『仏の畑の落穂』平井呈一訳「生神」による)

〈表1〉の浜口との対話において、(b)の忠は(c)の村人に先立って浜口の言動への不理解を示す役割、ひいては読者を代表して疑問を表明する役割を担っていることが分かる。

ここに、「神の身分に入る資格があると考えられる」「神に祭られるだけの値打のあった人」としての浜口に対して、凡夫代表の忠という作品の構図が認められる。

〈表2〉の対話において、「わたくし」に対し「哲学を専攻している日本の友人」が「仏陀のような微笑みを浮かべながら答え」という構図の中、仏のような日本人に対して「わたくし」は忠と同様に読者を代表して問う凡夫の役割を担っていると言えよう。

以上をⅡの3で述べたハーンによる史実の改変と併せて考察すると、神仏に相当する西洋の伝承話の中の老賢人のイメージを浜口に付する必要から浜口に老人の設定が、また浜口と

&lt;表 1&gt;

会話	浜口の言動 (a)	忠の言動 (b)	村人の言動 (c)
(1)	「忠! ——急いで——大急ぎで、たいまつを点けて来う!」(1a)	「おじいさん! あにするだ! おじいさん、あにするだ! あにするだよ!」(1b)	
(2)	「ええから、燃やしておけ!」「捨てておけ! それより、村の衆をみんなここへ集めろ! ——たいへんだ!」(2a)	孫の忠は、燃えさかる稲を、しばらく茫然と打ち眺めていたが、そのうちに、いきなりわっと泣き出したと思うと、そのままあたふたと家の方へ駆けもどって行った。——おじいさんはてっきり気がふれなすった。孫はそう思ったのである。(2b)	最初にやってきた救援隊は、20人ばかりのすばしこい百姓の若者たちで、これはただちに火を消し止める覚悟で駆けつけてきた連中であつた。(2c)
(3)	「稲はな、その子の言うとおりにじゃ。」「わしが稲に火をつけた。…さあ、みんなもう集まったか?」(3a)	「おじいさんは気がふれただ! ——おら、こわいよォ」「おじいさんは気がふれただ! わざと稲に火いつけただ! おら、火いつけるの見てただよォ!」(3b)	「みんな、おりやすで。——そこへもう参りやした、あんのこんだか、わしら、さっぱりわからねえが…」(傍線筆者)(3c)
(4)	「来たぞっ!」「さあ、これでも、わしは気がふれたか!」(4a)		「つなみだ——!」(4c)
(5)	「わしが稲に火をつけたわけは、これだったのじゃ。」(5a)	その時、小さな孫の忠が、おじいさんの側へ駆け寄ってきた。忠はおじいさんの手にすがりつくと、さっきはたわけを言つてすみませんといつて、あやまった。(5b)	組頭たちが打ちそろつて、浜口五兵衛の前に土下座をつくと、そこに居合わす一同もそれにならつて、いっせいに土下座をした。(5c)
(6)	「わしの家はのこつた。」「あこなら、大ぜいはいれる部屋がある。それと山の上の寺がある。残つたお身たちは、あこで一時しのぐのがよからう。」(6a)		村の人たちは、どつと歓声をあげた。(6c)

&lt;表 2&gt;

「わたくし」の言動	「哲学を専攻している日本の友人」の言動
<p>いったい、浜口の生きている生身のからだが一方向にあるのに、どうして村の人達は、それとはべつつ場所に、浜口の靈魂のあることを、合理的に想像することができるのか。(中略) それと同時に、かれら百姓たちが、浜口の存命中に拌んだものは、浜口の数ある靈魂のなかの一つの靈魂だけなのであるか。もしそうだとすると、かれら百姓たちは、浜口の数ある靈魂のなかから、ある特定の靈魂だけが、かれらの礼拝を受けるために、それだけひとりで離れて出てくるものだと考えているのか。</p>	<p>「その百姓たちは、人間の心霊や魂というもののは、その人が生きている間も、同時に方々にいることのできるものだと考えているのですね。こういう考え方は、むしろ、西洋の靈魂説とはだいぶちがっていますがね。」</p>
「西洋の方が合理的でしょう?」	「いや、それがですね」「かりにわれわれが、万物の心は一なりという説を承認するとすると、日本の百姓の考え方には、とにかく、多少の真理の片影が含まれているようです。ところが、西洋の靈魂説には、どうもそういうものがあるとは言えんようですね。」

対比する必要性から架空の幼い孫の患の造形が必要であったことが分かる。

賢人の先見に基づく言動が凡夫の誤解を招き、一旦は狂人扱いされるものの、話の終盤において人類が直面した危機の全容が明らかになり、賢人の言動が再び賞賛されるという話の展開は、ノアの方舟等聖書の中にも見出す事ができる伝承話の原型の一つである。

話の原型を利用しながら、ハーンは読者が魅力を感じる「生き神」実例としての浜口の話とその解説を付したのではないだろうか。

### Ⅲ. *A Living God* 欧米での伝播と再話

#### 1. *A Living God* 初出雑誌伝播の考察

*The Atlantic Monthly* は19世紀のアメリカ合衆国において、*Harper's New Monthly Magazine*, *Scientific American*, *The American Missionary* と並び称されて広く購読され影響力を持った定期刊行物である。それは米国議会図書館とコーネル大学図書館が協力して構築した American Memory Project The Nineteenth Century in Print: The Making of America in Periodicals 定期刊行物19誌デジタルコレクションに含まれる程である。

講読者の多い月刊誌において発表されたこと、次いで3社から相次いで単行本が刊行されたことが、欧米における *A Living God* 伝播と再話に寄与したと推測される。

#### 2. 他作家による再話状況

欧米では、<sup>(3)</sup>Sara Cone Bryant (以下、ブライアントと略す) による *How to Tell Stories to Children Sources for the story-teller* (Boston & New York Houghton Mifflin Company, 1905) 中の Stories Selected and Adapted for Telling の章、Especially for Classes II. And III の節、5 番目に *The Burning of the Ricefields* が掲載された。そこには出典を Lafcadio Hearn による *Gleanings in Buddha-Fields* (Kegan Paul, Trench, Trubner, & Co. Ltd, 1897) であると明記されている。この話は、*A Living God* の3章部分を小学校2・3年生向けストーリーテリング用に大変短く再話したものである。

その後 *How to Tell Stories to Children* は、副題を and some stories to tell に変えられた上、London George G. Harrap & Company から1910年に出版され、版を重ねた。

さらに *The Burning of the Ricefields* は Mamoru Funai の絵を付し、絵本 *The burning rice fields* (New York Holt, Rinehart and Winston, 1963) として出版された。

再話者<sup>(4)</sup>Margaret Hodges (以下、ホッジスと略す) は、a collection by Sara Cone Bryant 内の *The Burning of the Ricefields* のお話発見を契機に、そのお話を子どもたちが受けとめる反応を元として新たな再話を考えた。その結果、以上の経過をふまえ原作 Lafcadio Hearn の *Gleanings in Buddha-Fields* (Houghton Mifflin Company, 1897) を参照したと解説する、絵本 *The Wave Adapted from Lafcadio Hearn's Gleanings in Buddha-Fields* (Illustrated by Blair Lent Houghton Mifflin Company Boston, 1964) が出版された。管見本である大阪市中心図書館所蔵本はハードカバーの48ページ構成絵本であり、以上

の再話の経緯は、表紙カバーすでに印刷されている。

同書は1965年アメリカ合衆国の権威ある絵本賞 Coldecott Honour に輝き、その銀賞メダルを表紙に印刷したソフトカバー版が Harcourt Brace & Company Orlando Atlanta Austin Boston San Francisco Chicago Dallas New York Toronto London から2006年に再版され、現在も入手可能である。

府川源一郎の報告（『横浜国大言語教育研究』第14号 2001年）によると、Houghton Mifflin Company 社発行、アメリカ合衆国の小学校低中学年対象のリーダー教科書 *Spinners* に *The Burning of the Ricefields* が掲載されているという。これは、題名からしてブライアントによる *How to Tell Stories to Children* 収録の同名作品の影響下と推測される。

### 3. 欧米での再話、内容の比較

#### 3. 1 ブライアントによる再話の観点

ブライアントは、ストーリーテリングの理論書兼お話集の著者として、既述の *How to Tell Stories to Children* と、その続編とも言える *Stories to Tell to Children Fifty-one Stories with Some Suggestions for Telling* (Boston & New York Houghton Mifflin Company, 1907) で知られるアメリカ人女性である。

*How to Tell Stories to Children* の Preface では、調査とお話の読み語りの協力者として assistant superintendent of schools と children's librarian of Providence Public Library and Boston Public Library の名前が並ぶ。つまり学校の教室や公共図書館の児童室におけるストーリーテリングの際の子どもの反応をもとに収録するお話を編んだことがわかる。

さらに *Stories to Tell to Children* 中、Some Suggestions for The Story-telling の章では、*How to Tell Stories to Children* 刊行以来2年間の反響やストーリーテリングの結果に基づく書であることに触れる。そして、the primary teachers of Providence と their supervisor が小学校でのお話の時間に実践したお話のリストを掲載する。その他、同書には民話収集家や再話者が協力者として挙げられた。

以上のように実際のストーリーテリングによるお話の検証に注目するブライアントは、*How to Tell Stories to Children* の Chapter III Adaptation of stories for telling の冒頭で How to make a long story short という小項目を挙げウィータ作 *The Nurnberg Stove* (邦題：「ニュルンベルクの燵」) とジョン・ラスキン作 *The King of the Golden River* を例に長い話を短く再話する工夫について触れた。

*The Nurnberg Stove* について、ブライアントは話の冒頭の2つの前提（主人公アウグストが名工の名をとったヒルシュフォーゲルという名のストーブを好むこととアウグストの芸術家へのあこがれ）と、結末の2つの側面（アウグストが大好きなヒルシュフォーゲルと共にいることとそのように美しいものの創造を学ぶこと）とを結ぶ2つの道筋（アウグストが王さまによって見出されることとアウグストが美術学校へ入学すること）に注目する。この道筋の過程で、魅力的だが余計なエピソードを削除することの必要性に言及した。

ここでブライアントは明快な話の因果律と単純な話の筋を残して原作を短くすることが、お話をストーリーテリング向きにするだけでなく、後に原作を読んだ時の楽しみを増すと述べる。

*The King of the Golden River* についても、ブライアントは結末に至るまでの不可欠な出来事を選び子どもたちを飽きさせず魅了するよう簡潔かつ短く語ることの重要性を示した。情景描写を省略し、物語の真髄（3人の兄弟が財宝を得るために挑戦するが、冷酷な兄二人が失敗し愛情あふれる末弟が成功すること）が隠れている劇的な事件を中心に語ることを推奨した。

ブライアントはこのようなお話の改変を、原作の代用として意図したのではなく、原作が読み継がれていく一方で、語り継がれる短いお話として意図したと、説明する。

### 3. 2 ブライアントによる再話の内容的特徴

ハーンの *A Living God* 第3章を（A）、ブライアントの *The Burning of the Ricefields* を（B）と略し、その大きな相違点を以下にまとめる。

#### 3. 2. 1 物語の簡略化

①ハーンの（A）は2312語で構成されたのに対し、ブライアントの（B）は616語で構成され、原話の約4分の1に短縮された。特に、章末の「わたくし」と「哲学を専攻している日本の友人」との会話で明らかとなる「西洋の靈魂説」と「万物の心は一なり」という日本人との考え方の違いに触れた箇所は全て割愛された。

②祭りの準備にわく村の状況や海の平常の状況など情景描写は、事件の進展に関わる部分を除いて大幅に省略された。

③事件の終盤において、命を救われたことを悟った村人から浜口への感謝の言動が省略され、下のような村人が浜口を尊敬した理由を解説する文章が付された。

And when they saw what the old man had done, they honoured him above all men for the quick wit which had saved them all from the tidal wave. (傍線筆者)

#### 3. 2. 2 使用単語の簡略化

ハーン作品には、日本特有の風俗や固有名詞、状況を解説する文章が多い。脚注が振られた *ujigami* という語の他にも、文章中に解説がある例として *tsunami*, *Ojiisan*, *Choja*, *nobori*, *Taimatsu* などの語があるが、これらの単語と解説文章が以下のように変えられた。

①—tidal waves caused by enormous earthquakes or by submarine volcanic action. These awful sudden risings of the sea are called by the Japanese tsunami. (A)  
→ the tidal wave (B)

②Ojiisan, which means Grandfather; but, being the richest member of the community, he

was sometimes officially referred to as the Choja. (A)

→ a good old man, the grandfather, the old man, (B)

③ the festival banners (nobori) (A) → なし (B)

④ Taimatsu, or pine-torches, (A) → the brand, his torch

### 3. 2. 3 欧米の児童向け解説の付加

① 浜口の孫 Yone が稲田を大切にしたいの解説文章

The little boy loved the ricefields, dearly, for he knew that all the good food for all the people came from them; and he often helped his grandfather to watch over them.

② Yone が浜口の理不尽な行動に従う心情の解説文章

“Quick, set fire! thrust your brand in!” said the grandfather.

Yone thought his dear grandfather had lost his mind, and he began to sob; but a little Japanese boy always obeys, so though he sobbed, he thrust his torch in, and the sharp flame ran up the dry stalks. (傍線筆者)

### 3. 2. 4 欧米人にとって著名な日本人イメージの利用

① 孫の名前の改変…Tada (A) → Yone (B)

これには、1900年代の英米詩壇において Yone Noguchi として名声を得、ハーン没後、英米雑誌に発表したハーンとその文学に関する論評を1910年、単行本 *Lafcadio Hearn in Japan* にまとめた野口米次郎の通称名 Yone の反映と推測される。

当時、<sup>⑤</sup>単行本出版後に Times 記事等においてハーンと野口とを師弟視する誤解があったという。ハーン作品に注目したブライアントにとって、ハーンの紹介者 Yone Noguchi を連想させる Yone が親しみやすい日本人名であったのではないだろうか。

### 3. 2. 5 劇的効果を高める表現の付加

浜口の行動への村人の不理解の表現として、上記Ⅱ 4 <表 1 >の (3) と (4) の会話に相当する (B) 中の箇所を以下に挙げる。

And when they came to the mountain top, and saw the beautiful rice-crop all in flames, beyond help, they cried bitterly, “Who has done this thing? How did it happen?”

“I set fire,” said the old man, very solemnly; and the little grandson sobbed, “Grandfather set fire.”

But when they came fiercely round the old man, with “Why? Why?” he only turned and pointed to the sea, “Look!” he said. (傍線筆者)

上記Ⅱ 4 の<表 1 >中、(3c) の表現から、(A) では浜口の稲田に火をつけるという行動



に対して、村人は驚くばかりであった。一方、(B)では浜口への怒りを村人が表現している。

浜口の真意を理解できない村人が浜口を非難する場面が、村人が浜口への感謝と尊敬の念を表すに至る結末への山となっている。

### 3. 3 ブライアントによる再話の考察

欧米の子ども向けに語ることを念頭に置いた改変は、大胆である。

上記 3. 1 で紹介した長いお話を短く再話する際の重要事項は次のように反映された。

山に住む老人が海に面した村に住む人々を見守っていることを物語の発端とし、村人の命を津波から救ったことから村人に老人は尊敬されるという結末に向かい、余計な描写は割愛され劇的な事件のみが描かれた。

上記 3. 2. 5 で指摘したように、子どもたちを飽きさせず魅了するための創作も認められる。

また、原作において話の展開に活力を与える上記Ⅱ 4 <表 1>の会話は、同表中 (5a) (5b) (6a) (6c) について省略されたが、表現や地の文への変更も含め、大部分が *The Burning of the Ricefields* において活かされた。原作を重視するブライアントの観点が反映されたと言える。

### 3. 4 ホッジスによる再話の観点

*The Wave* のハードカバー Houghton Mifflin Company 版とソフトカバー Harcourt Brace & Company 版巻末 Note には、以下のような記載がある。

One of his many books about the Orient is *Gleanings in Buddha-Fields*, Houghton Mifflin Company, 1897, and included in it is the Japanese folktale on which *The Wave* is based. Although Lafcadio Hearn did not record the story with children in mind, nor did he give it a title, Margaret Hodges, children's librarian and noted storyteller, found that the tale had all the elements to keep children on the edge of their chairs.

She has told the story many times and in the best oral tradition has made certain adaptations in the course of the retellings. The present version, therefore, though it maintains the spirit, and even much of Lafcadio Hearn's language, has been shaped by the responses of many young audiences.

昔話由来の原作をハーンが題名からして子ども向けに再話しなかったにも拘わらず、児童図書館員かつ著名なストーリーテラーであるホッジスは原作を何度も子どもに読む過程で子どもをわくわくさせる要素に満ちていることに気付いたという。ホッジスは子どもへこのお話を読んだ際の反応から、ハーン文学の真髄を残したまま、*The Wave* として再話した。

ホッジス自身が児童図書館員、ストーリーテラーであることから、子どもの反応を直接受け止める立場にあったと推測され、その子どもの反応に基づく再話の観点は、3. 1 で述べたブライアントの観点と重なる。

### 3. 5 ホッジスによる再話の内容的特徴

ハーンの *A Living God* 第3章を (A)、ホッジスの *The Wave* を (C) と略し、その大きな相違点を以下にまとめる。

#### 3. 5. 1 物語の簡略化

①ハーンの (A) は2312語であるのに対し、ホッジスの (C) は1571語で構成され、原作の約68%に短縮された。特に、章末の「わたくし」と「哲学を専攻している日本の友人」との間で「西洋の靈魂説」と「万物の心は一なり」という日本人との考え方の違いに触れた箇所は全て割愛された。

②村の周辺環境と面した海との関係性、祭りの準備にわく村の状況、稲田の火によって浜口のもとに集まる村人の様子など情景描写の文章は、さし絵によって省略された。

③事件の後日談における、村人の浜口への尊敬の念としての神社 (his temple と表現された) 建立の文章は (C) 中、2段に亘り64語で綴られた。しかし、最後は下のような解説的文章で締めくくられた。これはプライアントの (B) と重なる。

His temple, they tell me, still stands and the people still honor the good old farmer who saved their lives from the great tidal wave by the burning of the rice fields. (傍線筆者)

#### 3. 5. 2 原作のニュアンスを残した使用単語

上記 3. 2. 2 で取り上げた日本特有の単語の改変を以下にあげる。

①—tidal waves caused by enormous earthquakes or by submarine volcanic action. These awful sudden risings of the sea are called by the Japanese tsunامي. (A)

→ a tidal wave, the great tidal wave (C)

②Ojisan, which means Grandfather; but, being the richest member of the community, he was sometimes officially referred to as the Choja. (A)

→ there lived a wise old man, Ojisan, a name that in Japan means Grandfather. their wise old friend, the good old farmer, the grandfather, the old man, (C)

③ the festival banners (nobori) (A) → festival banners (C)

④ Taimatsu, or pine-torches, (A) → a torch, a pine torch, the torch, (C)

#### 3. 5. 3 劇的効果を高める表現の付加

①忠が浜口に対して従順な理由の説明

Tada loved Ojisan dearly and gave him the obedience due to his great age and great wisdom. Indeed, the old man had the respect of all the villagers. Often they climbed up

the long zigzag road to ask him for advice.

## ②浜口の老賢人としての表現

“This is earthquake weather,” said Ojiisan. And presently an earthquake came.

As the quaking ceased, Ojiisan’s keen old eyes looked at the seashore.

But Ojiisan knew. In his lifetime it had never happened before. But he remembered things told him in his childhood by his father’s father. He understood what the sea was going to do and he must warn the villagers.

## ③浜口の行動への村人の不理解の表現

The men were angry. “All are here,” they said. They muttered among themselves, “The old man is mad. He will destroy our fields next!” And they threatened him with their fists.  
(傍線筆者)

### 3. 6 ホッジスによる再話の考察

3. 4 及び 3. 5. 1 に関して、ブライアントの再話と共通する部分が多い。3. 5. 2 に関して、孫の名前が Tada であることも加え、ハーンの原作と共通する部分が多い。ホッジスの表現媒体が絵本であることから、日本特有の文物の説明は絵が補っている。(A)(B) 両作品の良い所を採用していると言えよう。

3. 5. 3 に関して、ハーンの浜口に付した老賢人のイメージを更にホッジスは強調している(次頁図1参照)。<sup>①</sup>及び<sup>②</sup>における経験に基づく浜口の賢さと判断の確かさ、地震を予知する力など、孫や村人が尊敬する人物像がこの作品の前提にある。また、結末には自らの稲田を犠牲にしてまで村人の命を救った浜口を祭る神社建立が描かれる。だからこそ経過において<sup>③</sup>の村人の誤解が際立つ。

上記Ⅱ 4 <表1>の会話は全てホッジスの再話の中にも含まれるだけでなく、上記 3. 5. 3 ② 1 行目のように新たなセリフ “This is earthquake weather.” も加わった。

村人が出会った津波の威力の大きさとその後の惨状を説明するページが同書34ページから41ページまで8ページあり、その内、文字がなく絵だけで津波を説明するページ(次頁図2参照)が2ページある。子ども向けを意識した *The Wave* という題名が物語るように、津波被害を最小限に抑える浜口の賢さが強調された。話の展開に活力を与える会話が多く含まれ、絵がストーリーを語るこの作品には子どもを引き付ける要素が多いと言えよう。

## Ⅳ. まとめ

浜口が安政津波の体験を『濱口梧陵手記』に記録したこと、それを収録した『濱口梧陵傳』を楚人冠が編んだこと、その中の逸話を三陸大津波の報道の中で、『大阪毎日新聞』が伝えたこと、このような記録の伝承の結果、ハーンは *A Living God* を創作した。中でも3章のみに注目するとハーンの創作を再話文学と位置づけることができよう。

伝承の目的は、四者四様であった。浜口の場合、自分の備忘録として、楚人冠の場合、個



図 1：老賢人然とした浜口と孫の忠 (p.12)



図 2：村を飲み込む津波 (p.36-37)

人の伝記上の業績として、『大阪毎日新聞』記者の場合、津波被害を最小に留めた工夫として、ハーンの場合、「人を神として祀る習俗——とりわけ民族神道の際立った特徴である生き神崇拝を、西洋人読者にどのように『同情と共感をもって』理解させるかという」例として、記したのである。

ブライアントの場合、出版されたハーンの原作をさらに、子どもと図書を結びつけるストーリーテリングの効果的なお話として改変を加え再話した。ホッジスの場合、出版されたブライアントによる再話作品との出会いを契機に、ハーンの原作を読み、子ども向け絵本として出版した。

浜口による安政津波の体験記録からホッジスの絵本初版発行まで約110年が経過している。

長い期間にわたり浜口の話が国際的に再話された要因として、ハーンの果たした役割は大きいといえよう。

ハーンの *A Living God* 執筆言語が英語であったこと、*A Living God* 雑誌初出が当時のアメリカ合衆国で最も読まれた刊行雑誌の一つである *The Atlantic Monthly* であったこと、同作が収録された単行本 *Gleanings in Buddha-Fields* が様々な欧米の出版社で刊行され版が重ねられたこと、それを受容したブライアントとホッジスがそれぞれ子ども向けに再話しストーリーテリングの理論書や絵本として出版したこと、ブライアントの作品もホッジスの作品も様々な欧米の出版社から刊行され版が重ねられたことなどが、伝承と再話の国際化、長期化の要因として、具体的に挙げられる。

ブライアントの *How to Tell Stories to Children* に関して、I で触れたように、当時東京女子高等師範学校講師の倉橋が『婦人と子ども』12巻2号（フレーベル會 1911.2）の「机邊だより ○『話の仕方』ブライアント氏」において、「一 話の目的」と「二 話の仕方」を意識し紹介した。後に倉橋は日本幼稚園協会編『幼児に聞かせるお話』（内田老鶴圃 1920）を同協会主幹として編んだ際、「序」において「お話の選択は、容易の業ではない。殊に、子供の年齢に適応せしめることは、頗る困難なことである。しかも茲に一つの最もよい選択者が居る。それは即ち子供である。子供に話して聴かせて、其の反応を見るのである。（中略）即ち此の集のお話は、いづれも、東京女子高等師範学校附属幼稚園に於て、永い間、

多数、無邪気にして真実なる、小さい鑑賞家と批評家との厳密なる審査を経たもののみである。」と、子どもの反応によるお話の評価方法を採用したことを明らかにした。この評価方法は上記Ⅲ 3. 1 でブライアントが解説した方法であることは言うまでもない。

また、*How to Tell Stories to Children* は、当時東京高等師範学校附属小学校訓導であった水田光が日本最初のストーリーテリングの解説書として出版した『お話の研究』（大日本図書 1916）においても参考図書として多数箇所引用されている。水田は自著に収録したお話について、「『お話』は世界各国のものを採りましたが、中には原話其儘ではなく、私の作意を加へたものもあります。それは、『児童のためのお話』として、一層大切にしたい思ったからであります。」と、子どもむけの改変を公表した。この改変に当たっての姿勢は上記Ⅲ 3. 1 におけるブライアントの姿勢と重なる。

その他、口演童話家の岸辺福雄が『芸術教育』1巻8号（1921.8）にてストーリーテリングの教科書としてブライアントによる同書を紹介した。以上のように、明治・大正期にかけての日本において、幼児及び初等教育の場、口演童話の場、お話研究の場で *How to Tell Stories to Children* は読まれ、日本の子どもに与えるお話選択の価値観に影響を与えた。

*How to Tell Stories to Children* が既に教育関係者に広まっていたことを考えると、I で触れた「稲むらの火」の教科書採用に当たって、同書に収録された *The Burning of the Ricefields* を読んでいた教育関係者による関与があったと推測されるが、この件については稿を改めたい。

ブライアントやホッジスによる、子ども向けに原作の真髄を残して短く再話しストーリーテリングのお話もしくは絵本として子どもに与えた取り組みの結果、現在まで、ハーンの *A Living God* は読み継がれてきた。

以上より、文学作品が伝承していく可能性の一つとして、<sup>⑥</sup>ブライアントの著作への評価が長期間、高く保たれたことも念頭におくと、英語など公用語としての使用地域が広い言語による子ども向けの再話が考えられよう。

## 註

(1) 石井は1954年8月～1955年9月にロックフェラー財団フェロシップ奨学金により北米の公共図書館児童部を歴訪し、ピッツバーグ・カーネギー図書館学校で児童文学を学んだ。留学期間中に得たアン・キャロル・ムーアやリリアン・H・スミスら北米の児童図書館員、児童文学書評雑誌『ホーンブック』創刊者ミラー夫人、図書館学校講師で児童文学創作者エリザベス・ネズビットとの交流は、帰国後の石井による子どもの本の研究深化と児童図書館に関する活動の展開に寄与したことは言うまでもない。

また、石井は1961年カナダのトロントで開催されたストーリーテリング大会に参加し、英国の児童図書館員でストーリーテリングの名手アイリーン・コルウェルに出会った。

後に石井は、コルウェルの著作を『子どもと本の世界に生きて』（福音館書店1968、再版日本図書館協会1974）として、スミスの著作を『児童文学論』（瀬田貞二・渡辺茂男との共訳 岩波書店1964）として翻訳、出版した。両書は、現在も児童サービス論や児童文学の授業において、基礎資料ないしは必読書として高く評価されている。

(2) 『小泉八雲—西洋脱出の夢』（新潮社 1981）

- (3) 1873年生まれ、没年不詳。マサチューセッツ州メルローズ出身の著述家。ボストン大学卒後、雑誌記者、ボストンの Simmons College にて英語と詩を教える教師を経、1907年ボストンの Wheelock Kindergarten においてストーリーテリングの講義を始めた。これを契機に、合衆国内の主要都市にて同様の講義を行った。代表作に本文中掲載書のほか、*Stories to Tell the Little Ones* (1915) *I Am an American* (1918) *New Stories to Tell to Children* (1923) などがある。

*Who's Who in America 1936-1937*より

- (4) 1911年生まれ、2005年没。インディアナ州都インディアナポリス出身の著述家。バツサー女子大学、カーネギー工科大学卒後、ピッツバーグのカーネギー図書館にて児童図書館員の仕事に就く。ピッツバーグ公立学校においてお話の専門家として勤務後、ピッツバーグ大学、図書館学情報学分野の大学院の教員として勤務。1965年から1976年まで WQED-TV の Tell Me a Story という番組でストーリーテラーを務める。代表作は本文中掲載書のほかフィクション、ノンフィクション、再話、編著書だけでも57冊以上ある。ラフカディオ・ハーンの再話では、本文中掲載書のほか、*The Voice of the Great Bell (adapted from Some Chinese Ghosts)* 1989と *The Boy Who Drew Cats (adapted from Japanese Fairy Tales)* 2002がある。

*Something about the Author, Volume 167* (Thomson Gale, 2006) より

- (5) 堀まどか「鼠眉の引き倒しか」『講座 小泉八雲 I ハーンの人と周辺』（平川佑弘・牧野陽子編 新曜社 2009）に、その指摘がある。
- (6) *The Horn Book Magazine* 1950 July-August の Hunters Fare（読者からの質問欄）において、ストーリーテリングの初心者向けテキストとしてブライアントの *How to Tell Stories to Children* (Houghton, 1924) が、依然、最も有用な書であるとの記載がある。

本稿をご指導下さった田中功先生に心より感謝申し上げます。